

×

S 156

補入
小

思必用記
四

490.9
Sh-56
4

No. 3752

195/56



富士川文庫

2026

小児心用養育草卷四

目録

- ① 中花我國共ニ痘疹初メテ流行スルハ
- ② 痘疹の病ニ神明あるの候
- ③ 痘疹乃病の候
- ④ 痘疹乃病人居不ウツシヤウの候
- ⑤ 痘疹ニ禁物乃候
- ⑥ 痘疹乃病ニ禁物ニ合物乃候

- 七 痘疹始終の日数乃後
- 八 痘疹乃序病とある家の説 付あり 紅紙燭丸事
- 九 痘疹始く出候所の善悪の説
- 十 痘疹の形色れ善悪の説
- 十一 痘疹生死と決まる日期の説
- 十二 痘疹桑熱の時善悪れ説
- 十三 痘疹放標れ時善悪れ説
- 十四 痘疹起脹の時善悪れ説
- 十五 痘疹貫膿の時善悪れ説



小兒心肝書卷四 痘疹

牛山齋 香月啓益 撰

一 中原我國昔は痘疹初りて流行するに後
 ○痘疹心肝と云ふは痘疹の東漢に建武年中
 南陽と云ふ所より起りて久し時乃虜人け痘疹を傳ひ
 傳く申苑子流布する有る虜疹と名付たりて
 あり本州獨目乃流る唐乃高祖乃時永徽年中は
 痘疹西域より中國より傳へあると云ふなり一説
 あり一説あり 按ぶるはいふに黄帝扁鵲の書
 は病とのせびるる後漢に東唐乃初りたりあり

五下は時りやのいぬ
 (一) 痘疹 日本に於てハ聖武天皇乃御宇に葉は葉の
 人無凡は船とくるこれ新羅の玉よつる其船中人
 此而より他人有りて諸國にあはれく信をせしむ
 了とて續古事類に書きしるるなり此は痘の
 療治とよる事と云ふが故に之は古くは痘の
 人達もくは病は多矣然れども本邦乃西使の
 のせり

(二) 痘疹の病は神呪ある乃呪

(朝鮮) 乃人南秋にあらはるる鬼神は痘疹
 の病一交あると云ふは身と神をまて之を治す事はし

或人其くらくせの伝説は痘疹は神ハ聰明無慾
 乃神カクといふ交りる事なりと傳は鬼神あ
 り今秋に云々これすなり神のよあはれ也
 らト云てする時らるは標れる血汁と伝はる
 之腹にまきしるる痘疹の温熱の事
 外よりしるるいぬきと膿腫の事は標れる
 たりお癒しと云ふ病を致すその血汁と飲す之交
 せしそのぬき其病も之を治す事なり
 鬼神乃此の事と云ふ証ハ茶を用はるる法と
 逆する事と云ふ証ハ茶を用はるる法と
 ははまじらるる今世の人此病ハ鬼神乃病と云

茶と施し申るく居るがう苑をすの苑乃去らじ
 され居る申るがうとまへりてあられ他國の疫の
 外といふ申るとまへりてやうり日申る風俗とて
 律的といふ申るとまへりて家疫とてかゝ者あま
 律乃棚とて新にあらしと所内細地等とてまへり
 申るがう外よりり申るがう病者も害とる申
 するがう外よりり申るがう風俗とてまへり
 ○今時乃律道者、瘧瘧乃律、恒者大の律とて
 べしといふ恒者乃律ハ三韓三韓といふ地なり降伏乃
 律乃瘧ハ執羅乃律なりまへり病者ハはは外と
 して病魔乃律外よりり申るがう病者も害とる申

者此説ありまへり

②瘧瘧乃病此説

○瘧瘧乃病此説、瘧瘧乃病ハ胎毒と時行乃瘧邪
 と此説をあらわすといふ二つの者なり申るがう
 ばや父母乃胎内にある時行乃瘧毒とてけさせれ
 るとてそのまへりての瘧瘧とてけさせれ
 の内よわらるるされと胎毒といふ瘧瘧といふは天地の五運
 ち氣乃瘧瘧とてあらる瘧瘧乃瘧瘧此瘧瘧乃瘧瘧
 その胎毒乃氣とてあらる瘧瘧乃瘧瘧此瘧瘧乃瘧瘧
 瘧瘧とて瘧瘧とてあらる瘧瘧乃瘧瘧此瘧瘧乃瘧瘧
 とて瘧瘧とて瘧瘧とてあらる瘧瘧乃瘧瘧此瘧瘧乃瘧瘧

○出家比丘尼稱百山伏現ひんぎ乃な其その人ひとよよんんととるる事ことななれ
紗袴さこうををごごらら事ことわわららをを病びょう者じやよよんんととるる事ことななれ
べべここりり

○生人せいじん往來わうらいとといいひひとといいふふにに別べつれれぬぬ人ひとのの往來わうらいとといいふふ
けりけり熱ねつくく別べつれれぐぐくくけりけりぬぬ人ひとのの往來わうらいとといいふふにに又また
てて夜よよよすすれれ子このの別べつれれ別べつれれ者もの乃な婦むすめくくととももりりわわららぬぬこ
つつららぐぐららいいののけけががよよいいららるる事こと

○孝服こうふく乃な人ひととといいひひとといいふふにに服ふく忌ぎあるある人ひととといいふふにに
○月水げすいあるある女にょとといいひひとといいふふにに不ふ淨じやうななれれ事こと
○酒さけはは碎くだくくそのその息いき濁にごれれぬぬ人ひととといいふふにに又また
○葱ねぎ煙えん乃な其その人ひととといいひひとといいふふにに又また
○考こう事じとといいふふにに又また

親愛内よひる申るるれ は幸とひ葱の臭と

○瘞毒せどくとといいふふにに又また肺はい抱いだめめ膿うみ血ちゆうとといいふふにに又また

○歎なげのの人ひととといいふふにに又また

○いいのの人ひととといいふふにに又また

○腋わき氣きのの人ひととといいふふにに又また

○息いき乃な其その人ひととといいふふにに又また

○遠とほ治ちとといいふふにに又また

○汗あせ乃な其その人ひととといいふふにに又また

○房ふさ乃な其その人ひととといいふふにに又また

○麝香を諸病の介部臭くけ者乃歎

○油あげらる臭

○あまのりく髪毛とや臭

○蠟燭孤燭らど次消ら方臭あつくその一同は

燭よりびへうの孤燭とて蚊とやなうら

○魚多とをき又ハ者た臭といじあやうく魚の

骨や臭

○溝とらく圓と掃除く動乃けられ方臭

○病者よ對く掃けらるべうら

○病者よ對く瘡とあやべうら

○病者よ對く舞後小申らるれ

○病者乃居間弄り庭と掃除らる申らるれ

○病者乃居間弄り大猫乃歎高歎く申らるれ

○六瘡瘡乃病は林茶乃食地乃流

○一切公塩乃魚歎

○豆腐

○酒

○饅頭

○南蛮菓子

○油あげ乃歎

○饅頭

○茶

○餅

○菓子

○蜜餞乃歎

○肉食乃歎

○菓子乃歎

○臭と熱乃中葉

○辨証西匠の熱

○下く乃今如つては物なる醫術よきとらひと

ひく今にせしむるなり

七 痘瘡始終乃日数れ記

○熱蕪とく二月ありし和倍れとよりとらひ又ハ序

病といふなり

○放標とく二月ありし和倍れとよりとらひ

○起脹とく二月ありし和倍れとよりとらひ

○貫膿とく二月ありし和倍れとよりとらひ

○收膿とく二月ありし和倍れとよりとらひ

○初とく二月ありし和倍れとよりとらひ

乃始と熱とく二月ありし和倍れとよりとらひ

及ハバ又またありし和倍れとよりとらひ

るもありし和倍れとよりとらひ

餘々自之乎日ありし和倍れとよりとらひ

るもありし和倍れとよりとらひ

痘疹全去等と云ふなり

八 痘瘡乃序病とある乃記

○痘瘡乃序病とある乃記

○痘瘡乃序病とある乃記

○痘瘡乃序病とある乃記

○痘瘡乃序病とある乃記



小川月言集序

よく其病を治すに可くよき薬味は多しと云ふは、
ひききり一煎よりのをさうす

○初わり熱らる可きと云ふ熱壯らる者腹痛咳嗽鼻
涕涕と流し感胃傷寒の類は似て熱りし証は々

考種飲加減并麻葛根湯敗毒散の類と云ふ合く用
べきなりいふは方と云く汗と云ふは瘧疾の

一二りのちまざる事と云ふなりそとい瘧疾はあつた
く風寒の脈邪を汗出く邪を散す

○加減参蘇飲の方
人参 芍薬 茯苓 甘草 杏仁 半夏 陈皮 桑白皮 枳壳 枳实 木香 香薷 厚朴 羌活 独活 防风 白芷 羌活 独活 防风 白芷

葛根 各ホ 白茯苓 山查肉 牛房子 各半 牛中
右一劑として生薑と加く炙く用ひ

○加味特林葛根湯の方
葛根 升麻 赤芍 桔梗 防己 紫葳 川芎 山查肉 各ホ

牛房子 牛中 右生薑と加く炙く用ひ

○加減敗毒散の方
柴胡 海狗集卵 人参 枳实 枳壳 木香 香薷 厚朴 羌活 独活 防风 白芷

枳壳 羌活 独活 防风 白芷 荆芥 川芎 白
茯苓 山查肉 各ホ 桔梗 牛中 各ホ

右一劑として生薑と加く炙く用ひ

三方ハ久吾鼻乃加減れ妙方なり
○初りて熱出る時腹痛者あるは飲食乃停す

くすくす

○初らて熱出の時右の顔赤色黒色とありし或は
臭く口中臭き色なりハ色

○初らて熱出の時聲出る事なく聴聲乃ぶくあり
者ハ色

○初らて熱出の時虫出ると蛆のぶくけりハ色也
と吐く人便下とものわくし悪臭ありとありハ

○熱余らるとその中の痘出或ハあり百のありは痘わ
りくものありハ色赤は黄ばりものありハ色淡

○保嬰保赤全去痘疹全去言るはハ色あり
○初らて熱出の時其甚く二三日と経るも痘出

本末くありハ腰痛煩悶しと痰喘短気あり者ハ

うれ痘毒深きより出るあり清解散を飲べし

防凡 荆芥 蝉脱 桔梗 川芎 前胡

葛根 升麻 酒炒黄連 酒炒黄芩 紫草

木通 牛房子 連翹 山查子肉 甘草

右利しとく一葉一序とせりとせりハ色ハ

と赤しとく痘毒出く甚憚りともその險神のぶくし

○發熱之日痘出んとく物ありやなく驚搐とせりし

初らて躁しきその脈浮大ありとく虚あり者ハ

予血虚弱しとく痘毒とせり赤し送るるありハ色

るり温中益氣湯と用くよハ人參 白朮 黄芪

當酸

白茯苓

川芎

各ホ

白芷

防風

木香

肉桂

山查子

其中

各ホ

右利

く

甘姜

と加

く

考

り

血と温

補

され

れ

瘡

察

し

出

く

ぬ

ろ

よ

二

疔

あり

ひ

の

ひ

の

へ

虚

子

屬

と

温

二

疔

あり

ひ

の

實

子

屬

と

温

中

益

氣

湯

よ

り

二

疔

あり

二

方

共

は

活

切

心

法

は

出

り

考

り

用

く

効

と

れ

事

あり

十三

瘡

瘡

放

標

乃

時

節

癩

病

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

癩

○痘初く出る時登り食らる跡のびくく二日同より
 ちき粟粒乃ぶく二日同より赤むきればぶくは
 くよ大にけりく互にぶくよりりくその色す
 わるくむらぶく紅乃縁とい根とよしうらや
 みして大小便若れぶく飲食事けぶくなりを順
 症といひく茶と服はほよ及びぬるけりく上り後
 餘嬰油係赤金去等よるり

○放標の患伝といふ登變わるとくある二日同
 痘出る者一乃患症るとくは後出られは次べ一茶
 熱わらせるとく痘出る者八九一せよとあるべ
 痘出ると熱一ぬんは一出又痘出る者一ぬんは

痘患一

○痘始く出る事天痘腫乃ぶくけりとの患一
 ○痘出るとそのとちけ肉乃色と同き者患一
 ○痘出ると今く起脹せは焼湯疹乃くそのぶく
 ちハ患一
 ○痘出るかとおりのハかられけりくおりのと又あるを
 者ハ患一

○痘出るとそれ皮く破れややく汁出る者患一
 ○痘出るとほと腰痛事多くは臭く息わくは
 けり者ハ患一

○痘出るといふ後七熱いすと退申多く機言とあり

鬼神とつるうぶとく好んく冷水と飲者ハ悪寒あり
 ○痘せらうひく痘疹の頸こぐれらうくちうくこころん
 りと者ハ血分ケツブン子熱チネツ甚シとゆらりの悪病ハ變カとしてす
 ○痘おこく其色シキは紫黒シキとしてかりき枯者九死クシ一ヒトとる
 一ハ悪病とあらし

○痘おこく血ケツをシめてすまるとりこれとあざれい
 血とあざとのハ
 ○痘おこく疹乃頂陷シメとく凹カクハ其巾汁シをシはく
 跡乃ぶく黒クロとあざらうハ大悪病とる
 ○痘おこくうひくを赤アカくば皮膚フは落クしてこれハ
 ちハ疹破シ屋ヤとシのハけ人氣分の虚キとら也ヤとる



④痘疹起脹乃時第其惡乃候

○起脹之自乃時よりよおしむらひの如くはばりぬるは
 とれくむらひの根肥満く光るを顔目少腫れを
 以て悪くはむらひと出く其期はありく貫膿やまわけ
 飲食そのおとくを中後そのおとくを順症とく瘰
 瘰と加ふるよぬるは事なり
 ○起脹乃時悪毒と遍身一乳中
 起脹をばい大ぬらひをまるとるべし
 ○痘乃色紫黒色にりく起脹せむらひ悪毒なり
 ○痘起脹せむらひく黯黒く端至同化るるを
 くありは外氣昏きハ悪毒なり

○起脹乃時吐逆して食せむらひ下り少便は血を下
 とる有ハ悪毒なり

○起脹乃時痘乃色白く灰色なりハ悪毒なり

○起脹乃時水疱目赤帯るるやまは腫剛しく潰云
 とりハ鬼眼なり

○起脹乃時痘乃色紫より或ハ焦黒色にりく悪毒に
 けむらひ方醫果集案保糸全云とるなり

○起脹乃時痘乃色紫より或ハ焦黒色にりく悪毒に
 けむらひ方醫果集案保糸全云とるなり

○起脹乃時痘乃色紫より或ハ焦黒色にりく悪毒に
 けむらひ方醫果集案保糸全云とるなり

○起脹乃時痘乃色紫より或ハ焦黒色にりく悪毒に
 けむらひ方醫果集案保糸全云とるなり

○起脹乃時痘乃色紫より或ハ焦黒色にりく悪毒に
 けむらひ方醫果集案保糸全云とるなり

- 子 前胡 生地黃 紫菀草 白芍 杏仁 紅花
- 人中參 黃芪 牛房

○痘起脹乃時風室の氣あり鼻は清涕を流し

咳嗽之病つゝは風と熱と自汗一身戦慄
 瘧疾の色惨白色あしく白け あり者ハ中和湯と前
 一 人参 黄芩 厚朴 白芷 川芎 當歸
 桔梗 防凡 杏仁 肉桂 藿香 甘草
 吉利きり 芍薬しやくやく 生姜しやうきやう 大枣たいざい と加へて煎じて糯米こむぎ
 と加へて炒る

○瘧疾起脹乃時邪穢けりなり けられぬ者ま 又少れく其瘧出
 ね又いせく故起脹なり 者ハ平和湯と前ト
 人参 當歸 桔梗 白朮 紫蘇 黃芪 各ホ
 防凡 白芍 耳中 肉桂 沉香 檀香 乳香
 藿香 右劑と一して生姜と加へて水煎じて用じ

外ハ蒼朮 羌活 沉香 檀香 乳香 の煎と燒くとの邪
 氣と去へし

⑤瘧疾貫膿乃時節苦寒乃説

○瘧疾如く初てより七日よりありてと貫膿乃時
 ちり其形瘧疾なり して先以ありて強水つよみづ 乃ぶく
 けく蒼朮乃色とあり玉蜀黍乃形れおとくはそ
 麻子まし せバその皮かわ ぬく飲食おんじ つねのぶく大由おほし 後者のち は
 とくあり者なり と順症じゆんじやう と茶ちや と酒しゆ 乃及およ ばはあり
 ○貫膿乃時熱症とハ瘧疾なり 出く七日よりありて
 とおりぬく瘧乃頂隔ていかく 之貫膿くわんぬ せぬあり
 ○貫膿乃時瘧の色とけ灰色はいしき けく仲隔ちゆうかく 乃瘧

悪病也貫膿乃時々瘡瘡志行り子脹起よよりく
はうハ痛出るものなるまはまきびく痛く堪
くはれどせりるハ悪病とせらるべし

○貫膿乃時瘡乃色紫黒は敷し煤乃ぶくりりい
る証なりし名は前餘 平自人乃れ血と切り時 きたりぬらよ
ても妙なめても一服くして常汁茶とせらるべし

みして用ぬ其色赤付はよくかりものなりし瘡蓋志
なりは拭くまらしとゆかりりけ方紫黒なる野人
乃傳あり

○貫膿乃時志行りよその瘡痒きそのハ思伝らるる瘡
酒くするべし

○貫膿乃時志行りよその瘡痒きそのハ思伝らるる瘡
酒くするべし

るハ汁まをけくおとくけく痒きそのわれハ小
兒必あやしく掻破りよつるなりし起脹乃時より
よよ手印とけく血乃瘡はあつるぬやうし

瘡と瘡搔よハ兎乃手と角じらるる 本邦乃伝
るハ畜へとくものなり

○貫膿乃時よりんと付く眼乃うらち鼻乃うらちを
と念と入くくらるべしけあよるくやまの時に眼のぶま
鼻ふくぐりくまきけぬけ輪者よあるなり

のつていり

○貫膿乃時瘡乃色紅は紫めして乾さ枯く焦黒は
裏どる者ハ毒さうしめして血凝なり必脹とけさびて

裏どる者ハ毒さうしめして血凝なり必脹とけさびて

悪症とあるや、多し清毒活血湯と用べし

紫草 藜蘆 紫明 牛房 木通 生地炭

生白芍 連翹 栝樓 酒萹苳 酒黃連 山查

人參 生黃芪 各多 耳中 右利とく

生薑一厚切て水煎し服せしものまろし神のまろし

○貫膿乃付瘻の色淡白よして尖瘻とくは膿と分

きざる者ハ瘻込なりと多し參茸鹿茸湯と用べし

鹿茸 黃芪 當歸 人參 各多 耳中 少許

右利やして生薑一厚切て神眼肉三箇入る者ハ瘻と

多の瘻紅活と物とく貫膿とらるる者ハ瘻込なり

病ハ寒と戦 瘻込なりと牙 齒ととありしは

何方より肉桂附子と加へし 泄瀉 腸のりる

そのとく藜蘆とく白朮 白芍 紫明 白

扁豆 木香 丁香 肉桂と加へく用べし

○貫膿乃付瘻初より瘻込を瘻ととらばるる者ハ瘻

内托散と用べし 人參 當歸 黃芪 白芍

川芎 肉桂 山查子 木香 防己 白芷 厚朴

各多 耳中 少許 右利やして生薑一厚切て加へく

者ハ瘻込なりとく神のまろし一方は栝樓

紫草と加ふをよし

○貫膿乃付瘻子屬する者ハ膿とけりよしとく

て瘻込なりと病ハ瘻込なりとありしは瘻込なり

こめいこく 喘ぐこく 寒戦咬牙なる者ハるる証
 ちりちり子保之湯と用べし 黄芪 人参 中
 耳艸 少許 右利とくく 牛黄 桑葉と加くく 煎じ服
 ぶぐー 肉桂と加くく 人参 黄芪の力とたけりては
 川芎 白朮 肉桂と加くく 大保之湯と名づくは方
 想ぐく 瘧疾乃悪証ハ寒なる者子用くく まま
 汗のぶく

○貫膿乃付虚をくくして身激く汗出る事やま
 煩悶一或ハ寒戦咬牙なる者子歸芪湯と用べし
 當飯 黄芪 各等 酸枣仁 少々 右利とくく 水煎
 一服とくく

○貫膿乃付虚より属らる者よりハ瘧と瘵と瘵ハ飲食
 減少しこ消身より食を食き者ハ補中益気湯と用べし
 各中 人参 黄芪 白朮 各等 當飯 陳皮
 升麻 柴胡 芍薬 各少 右利とくく 生
 姜 桑葉とくく 煎じ服べし ○寒戦咬牙なる者
 ハ肉桂 附子と加べし ○泄瀉せば 白茯苓 半夏 貝母と加
 連肉と加べし ○瘵あらし白茯苓 半夏 貝母と加
 べし ○小便通ぜざらば 茯苓 車前子 澤瀉と加べし
 ○甚瘵まよハ防風 荆芥 蘇連 翹と加べし ○け方と用
 る子 連翹 山査子と加くめらる

